

巻 頭 言

福田正己（支部幹事長）

日本雪氷学会北海道支部創立31周年目の今年、「雪氷調査法」がいよいよ出版される。6月末の暑い日に最終原稿のとりまとめを終えた。生活に密接に関わる雪氷現象をどのように捉えるか、その手引書とも云うべき「雪氷調査法」は、多くの方々の御協力でようやくまとまり、今年末には会員の方々の手元にお届けすることが出来ることになった。2ケ年にわたる執筆と編集作業の過程で、当たり前と思っていたことが、実はあいまいであったり、あるいは執筆担当者の間での統一がとれていなかったりして、決して順調にまとめられたわけではない。いわば生みの苦しみを経て、日本で初めての「雪氷調査法」が出来上がったわけである。北海道支部所属の会員にとどまらず、広く全国の会員の中から選んで専門テーマごとに最適の方々に執筆して頂いた。この調査法の執筆のために、幾度となく野外での観測を繰り返して下さったとの話も聞いており、いずれも期待通りの内容となった。

また、原稿がすべて揃った段階で、たびたび編集会議を開き、用語や内容の統一や、図版の統一を心がけたが、その都度担当執筆者には原稿の手直しをお願いした。いずれも御多忙の折でもあり、こうした手間をおかけするのはいささか心苦しくもあったが、「調査法」の内容の充実のためと御理解いただいた。

「調査法」の出版準備中にも、さまざまな分野からの問い合わせが寄せられた。たとえば、「道路雪氷」については主な自動車製造メーカーからの問い合わせが続いた。聞くところによると、主な自動車メーカーはすべて北海道に寒冷テストコースを設置したとのこと。やはり寒冷と積雪に対応する技術を培うには、その場所で実際に試験するのが欠かせないわけで、各社ともに並々ならぬ研究開発計画をもって望んでいるのであろう。平成元年2月に士別市で開催した支部地方談話会でも、トヨタ自動車の士別試験場の事業内容が詳細に報告され、多くの人々の関心を呼んでいた。圧雪路面状態を人為的に作り出す過程がビデオで紹介されたが、木下式積雪硬度計を使用している様子が映し出された。折から談話会に

は木下誠一北星学園大教授も出席しており、講演ののちトヨタ関係者から直接質問がなされるなど、路面積雪調査への関心の高さがうかがわれた。その折にも、「雪氷調査法」の刊行予定であると説明したところ、ぜひ刊行の後には積極的に活用したいとのことで、30周年事業へ協賛して頂くことが出来た。

最近のリゾート開発ブームのなかで、スキーリゾートを新たに企画するところも多い。しかし、スキー場を設計し安全に運営・管理するためには、その基礎となる積雪調査は欠かせない。そこで今回刊行する「調査法」ではとくにスキー場の設計に関わる調査法を取り上げた。おそらくこのような課題を取り上げた調査法はいままでにも例がないと思われる。これは当初30周年記念事業の目的として、理学と実学との融合の推進を掲げていたが、それに合致する1つの成果ともいえよう。このほかにも、さまざまなテーマを選んで、15章にわたって雪氷調査を分かりやすく解説している。

海外にも事例のない、「雪氷調査法」の出版は、まさに日本雪氷学会北海道支部30周年記念事業にふさわしいものではあるが、一方でまたそれだけ困難な面も多く、あるいは今後さらに改訂を重ねて、完全なものを目指すことになるかも知れない。しかもこうした「調査法」の充実は、多くの会員の方々の指摘と御意見によって成し遂げられるので、刊行のあかつきには厳しい助言を含めて会員各位からのご意見を支部事務局へお寄せ願いたい。さらにこの「調査法」をテキストとした、技術講習会も将来開催し、広く「調査法」の普及に努める計画も進めている。2ヶ年を要した30周年事業もようやく完了しようとしている。

あきたぶき

雪が少なめで、地吹雪があまり発生しなかった、1989/90年の冬であった。人びとの生活には、過ごしやすい冬であった。

だが、耕地防風林の雪丘調査、鉄道防雪林の雪丘調査とも、あまり良い成果が得られなかった。野外で、丸太杭を打ち、地吹雪を捕捉する実験も、板に箸を立てて、地吹雪を捕捉する模型実験も、あまり良い成果が得られなかった。お天気任せの調査の、限界なのであろう。次の冬こそ、強い地吹雪を期待したいが、人びとが困ることを期待するのだから、気がひけるものだ。

アキタブキは、前年の秋には、既に、地表に蕾が出て来ている。これは、長い冬の間、雪の下で、じっと春を待っている。雪解けとほとんど同時に、蕾が開いて、蔀のとうとなる。これは、花の集合体であり、小さい花が集まって、花序（頭花）をつくり、これらが集って、複花序（蔀のとう）をつくる。これには、雌株と雄株があり、しかも、株は栄養繁殖するので、雌株群と雄株群とは、別々に存在する。

開花、受粉が終わると、雄株は萎れ、雌株は伸び出す。伸びて、高さが1mにもなり、綿毛つきのタネ（そう果）を風にとばす。本種フキ（いわゆる京蔀, *Patasites japonicus*）と比較して、変種アキタブキ（秋田蔀、大蔀）は、葉も巨大であり、var. *giganteus*という学名になっている。

斎藤新一郎



アキタブキ

平成2年度研究発表会講演要旨

日時：平成2年6月6日（水） 10：30 - 15：30

場所：北海道大学百年記念会館 大会議室

午前の部

10：00 - 10：30 支部総会

研究発表会 (発表時間 15分 質疑応答を含む)

10：30 - 12：00 座長 石本 敬志 (北海道開発局)

① ニセコスキー場の雪崩

秋田谷英次・清水弘・成瀬廉二・福沢卓也 (低温研)

② スキー場における過去の雪崩災害解析と雪崩対策に関する研究

天野隆明 (低温研)・中村浩 (北海道開発局)

③ 雪崩防止柵アンカーの施行と耐荷力について

黒川國夫 (開発土木研)

④ しもざらめ雪の急速発達

福沢卓也・秋田谷英次 (低温研)

⑤ 冬の気象の教材化

高橋庸哉 (青少年科学館)

⑥ 冬型災害による道路運行規制の実態分析

千葉敏和 (開発土木研)

午後の部

13：10 - 15：30

座長 兒玉 裕二 (北大低温科学研究所)

⑦ 凹凸のある屋根面の屋上積雪分布調査

苫米地司 (道工大)

⑧ 膜材を用いた屋根の屋根雪滑落性状について

山口英次・苫米地司 (道工大)

⑨ 札幌における住宅地の雪問題の発生状況

高橋章弘 (道寒地研)・苫米地司・大垣直明 (道工大)

- ⑩ 吹雪・吹きだまりの数値シミュレーションの応用
ーモレエ山における実測との比較ー
中田琢志・植松孝彦・金田安弘・竹内敬二(気象協会)・佐藤守(札幌市)
- ⑪ 耕地防風林の地吹雪捕捉機能と林木の雪害について(第2報)
斉藤新一郎・成田俊司・長坂 有(道林試場)
- ⑫ 積雪センサーを組み込んだ融雪パネル
佐山惣吾・西山泰則(北開試)・岩本龍明(アイケン工)
- ⑬ 融けている雪面に放置しても傾かない積雪板(序報)
小島賢治(中央区南9西17)
- ⑭ 雪面蒸発量の斜度依存について(2)
高橋修平・榎本浩之・百武欣二(北見工大)
- ⑮ 電気抵抗探査による置戸町の永久凍土と地下水の調査結果
原田鉦一郎・福田正己・石崎武志(低温研)
- ⑯ 伏条更新によるアカエゾマツの氷河期における生残りについて
斉藤新一郎・川辺百樹(道林試場)